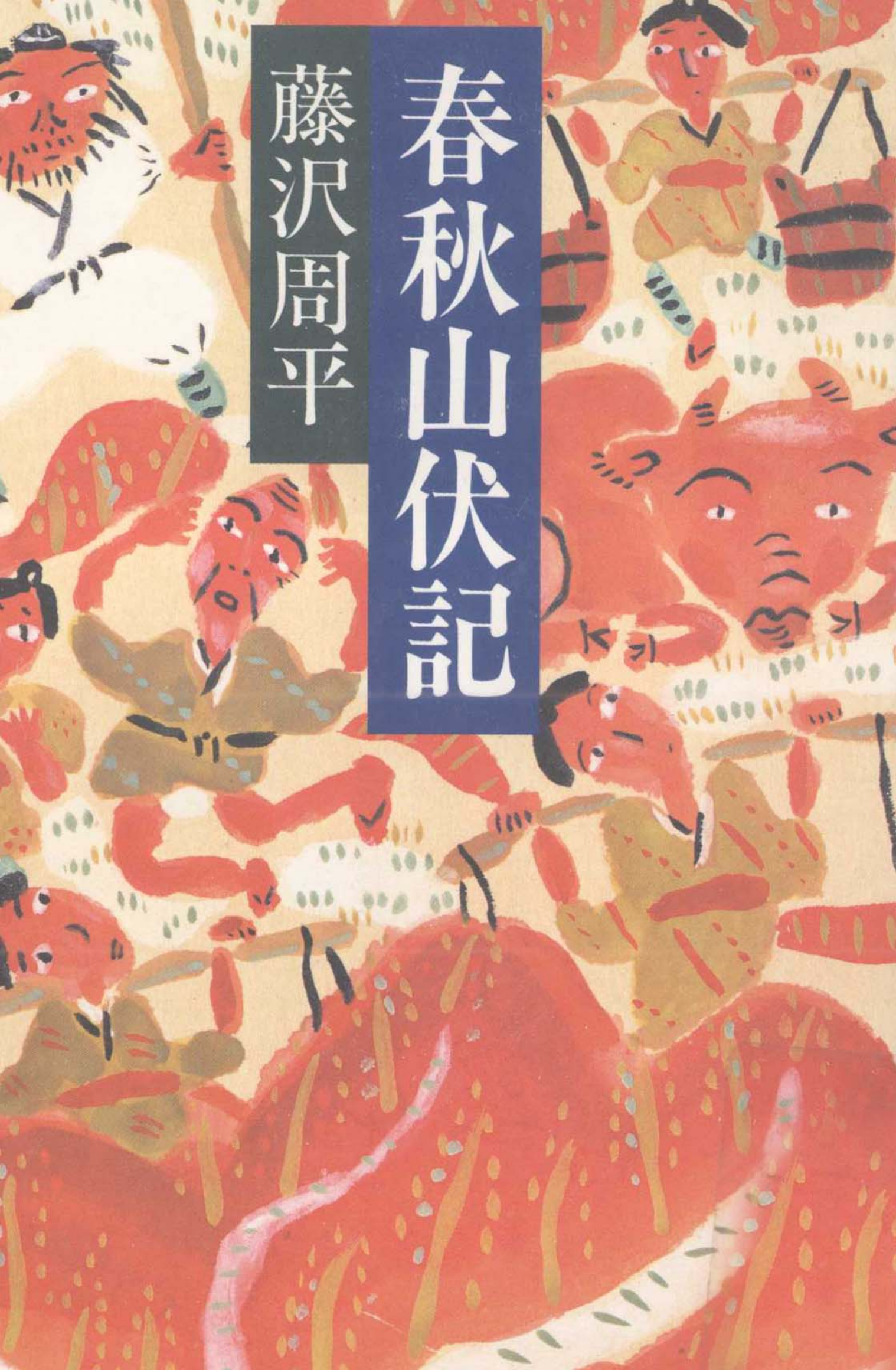


春秋山伏記

藤沢周平



しゆん じゆう やま ぶし き
春 秋 山 伏 記

新潮文庫

ふ - 11 - 8



昭和五十九年二月二十五日 発行
昭和六十二年二月十日 六刷

著 者 藤 沢 周 平

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二

東京 都 新宿 区 矢来 町 七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇

振替 東京 四 一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Shûhei Fujisawa 1978 Printed in Japan

ISBN4-10-124708-0 C0193

新 潮 文 庫

春 秋 山 伏 記

藤 沢 周 平 著



新 潮 社 版

3146

目次

験 試 し	七
狐の足あと	五
火の家	六
安蔵の嫁	四
人攫い	八
あとがき	五

解説 藤田昌司

伏記

験 試 し

—

「だれか……」

おとしは地面にぺたりと腹ばって、切りたつた崖がけの下にいったばいに腕をのばしたまま、首を回して野を見た。眼もくらむ真昼の光が野を灼やいているばかりで、人影は見えなかった。

「たみえ、たみえ」

おとしは顔を戻して、崖の下に囁ささやきかけた。

「もう少し我慢しえの。あばれねで、じっとしていれの」

崖の下で、細ぼそと子供の泣き声がした。崖の下からは、泣き声を威嚇いかくするような川音が、絶え間なく立ちのぼってくる。

赤川の向う岸から、この母子を見かけた人がいれば、こちらの岸にいま見えている光景に、顔色を変えたに違いない。崖の下もとにのばしたおとしの両腕に、女の子がぶらさがっている。

子供の足は宙に浮いて、その下は、このあたりで淀みと呼ばれている深淵だった。

淀みサ、行くなよと、親たちは川遊びに行く子供たちに、口を酸っぱくして言う。この土地で、最上川に次ぐ大河である赤川の水流は、このあたりで深く岸を挟って湾流し、それでも水の勢いはとまらずに、川底を掘りつづけて、底も見えない深く暗い淀みをつくった。

かわりに対岸は浅瀬になり、いまは砂地と石ころの河床が白く露出している。

淀みに落ちると、死骸が上がりたと言われた。そんなことから、淀みには背に苔が生えた河童が棲むとか、黒松の幹ほどもある胴をもつ水蛇がひそんでいるとか言い伝えられてきている。それでも血気盛んな村の若者が、魚を刺しに淵に潜ることがあったが、若者たちにしても、まだ淀みの底を見た者はいないという話だった。

何年か前、上流で溺れた子供が、流れに運ばれて淀みに引きこまれたことがあった。そのとき、村人が見まもる中で、与吉という潜りの達者が、曳綱を身体に巻きつけて底に潜ったが、やはり言い伝えられるように、子供を探しあてることが出来なかった。

「夜間と同じでの。暗くてなにも見ね」

上がってきた与吉はそう言った。

夜のように暗い水の底が、おとしの眼の奥を横切る。与吉も河童にとられたかと、村の人が青くなっただほど長かった与吉の潜りを、おとしも見ている。

たみえの足の下二丈ほどのところに、与吉が潜った水面があった。むしろゆったりと流れ

る水が、時どき牙をむいてみせるように渦を巻き、そのあと不満そうに青白い泡を吹きあげて、水面はまたもとの静かな流れに返る。

——もう少しすれば……。

向かい側の川原に、水遊びの子供たちがやってくるかも知れない。おとしは、眼に入る汗を、顔を振ってはらいながらそう思った。だが子供たちがやってきて、こっちの様子に気づいても、それから対岸の村に人を呼びに走り、大人たちが上流にある橋を渡ってこちらへくるまでは、長い刻がかかるのだ。それまで腕の力がもつだろうか。

——もだね。

とおとしは思った。のぼしたままの腕は、もう他人のもののように感覚を失ないかけていた。肩から先が、ひどくだるかった。やがて、ずるりと力が抜けるだろう。

おとしは眼をつぶった。石ころのように落ちて行きたみえの小さな身体が見えた。

——そのときは、おらも飛びこもう。

そこまで考えて、おとしは、はっと眼をみひらいた。死んでなるものか、と思った。

「たみえ」

声をかけると、子供が上を見あげて「ンま（お母さん）」と言った。子供は涙で顔を汚していたが、泣き声は立てなかった。

「もう少し待てよ。すぐひっぱってやつさげの」

おとしは向かい岸の河原を見つめた。そこに現われる子供たちだけが頼りだった。後方にあるおとしの村の人たちは、昼飯を喰べ終ったころだが、すぐには野に出て来ないだろう。暑い夏の盛りには、飯を喰い終ったあと、一刻ほど村人は昼寝をするならわしである。その間、野は無人になる。そうしないと、日盛りの野良仕事に身体がもたないのだ。

——近道など、さねばえがった。

おとしは悔んでも悔み切れないほどだった。子供を連れて畑に出たおとしは、仕事を切りあげるのが少し遅れた。茄子^{なす}についた虫取りに夢中で、刻を忘れていたのである。畑を出ると、もうみんな昼餉^{ひるげ}に帰ったあとらしく、野には人影がなかった。

家には年取った母親がいるだけである。おとしは気がせいて、ふだんは通らない川岸に出た。その方が近道になる。たみえが先に立って、時どき走ったりするのを、おとしは後から「ほらほら、危ねえぞ」と声をかけたが、それほど川のことを心配していたわけではなかった。

だが、淀みのそばまで来たとき、おとしは駆け寄ってたみえの腕を掴んだ。危いから、その場所だけは手をつないで行こうと、無意識にしたことだった。だが次の瞬間、たみえの身体は吸いこまれるように崖をすべって落ちた。身体を投げ出して子供の腕を掴み直し、泣きわめいてさしのべるもう片方の手を掴んだのが精一杯だった。その姿勢で引き揚げようとすると、三つの子供の身体が石のように重かった。

——近道したさげ。

昼餉に戻らない母子を案じて、母親が迎えに出たかも知れない。だがもしそうだとすると、母親は川岸の道には気づくはずがない。

おとしは青ざめた頬に涙を流した。腕からだんだんに力が抜けて行くのがわかる。最後の刻が近づいているのをおとしは感じた。

「だれかー、助けてくれちゃ」

突然おとしは絶叫した。さっきも、さんざん人を呼んだのだ。が、誰も来なかった。叫んでも無駄だった。だが無駄だと知っても、おとしは叫ばずにいられなかった。腕の力が尽きようとしていた。

「だれか……」

おとしは幽鬼の相に変った顔をあげて叫んだ。

そのとき、不意に頭の上で声がした。

「よし、離すなよ。いま助けでやつぞ」

おとしの横に、白い大きなものが、同じように腹ばった。

——あ、力がなくなる。

おとしがそう思ったとき、腕がすっと軽くなった。

白装束の大男が、軽がると子供を引きあげて立ちあがるのを、おとしはまだ地面に腹ばっ

たまま、首をねじむけて茫然と見上げた。

「危ねどごだったの、あね（若い女の一般的な呼称）」

白衣の肩から結袈裟をかけ、頭を白布の宝冠で覆った大男は、潰れた濁み声でそう言う、子供を抱いたまま、おとしの腕を掴まえて立たせようとした。

おとしはその腕に縋って立とうとしたが、足が力を失なっていて立てなかった。

「腰抜けでしまったがの」

大男は呟くと、おとしの腕を掴みなおし、無雑作に川岸から二、三間引き離れた。凄力で、小柄なおとしの身体は、草の上に軽がると引きずられた。

草の上にぺたりと腰をおとしたおとしの前に、男はそつと子供をおろすと、そこに置いてあった笈を背負った。子供は地面におろされると、もうさっきの恐怖を忘れた顔で、きよんと母親を見上げたが、おとしは奪い取るように、子供を抱きしめてはげしく泣いた。

「助けられました、おんぎよう（行者）さま」

と、おとしは涙をふきふき漸く言った。何度も頭を下げた。手をあわせて大男をおがんだが、それでも足りないぐらい、相手が有難く思われた。

「もう少しで、この子の命、無くすぞでした」

「おんぎようでは無」

と、大男は重おもしろくおとしの言葉を訂正した。

「俺は羽黒がらきた山伏だ」

二

小^{こぎ}箆にとりたての茄子と豆を入れ、たみえを連れておとしは村はずれの家を出た。まだ腰から下に力がなく、石につまずいたりすると、ころびそうになる。おとしはゆっくり村の中を歩いた。

し
畑仕事が残っているが、おとしは今日の仕事を休んだ。母親もそうした方がいいと言った。仕事に出る気分ではなく、おとしの頭の中にはまだ青い渦巻が浮かんで消え、消え、消えする。そのたびに胸がはげしく動悸^{どうき}を打った。ふだん見慣れている川を、こんなにこわいと思つたのははじめてだった。

験
三つのたみえは、もうけろりとしている。母親の先になり後になり、ときどき無人の家の庭先をのぞきこんだりして、活発に歩いて行く。

八ツ（午後二時）過ぎの村は、明るくひっそりしている。大人も子供も、あらかた野良仕事に出かけて、家の中には年寄が残っているという家が多いためだった。たみえが振りかえつた。

「ンま、どこサ行くな？」

「お宮サ」

おとしが答えると、たみえはおみや、おみやと叫んで、また走り出した。短い裾がはね上がって、たみえの白く肥った足が、小兎のように跳びはねるのを見ながら、おとしはあのひとが来なかったら、二人ともいまごろ生きてはいなかったと思つた。すると、熱く白い日射しの中で、突然襲つてきた寒気に貫かれたように、また一瞬身体が総毛だった。

おとしは五年前、三里ほど川上さかのぼに溯つたところにある山村に嫁に行った。十八だった。田畑だけの村に育つたおとしは、嫁入つた当座慣れない山仕事に辛い思いをしたが、柴しばを背負しょい出したり、炭焼きを手伝つたりする暮らしにも漸く馴れたころ、子供が生まれた。

馴なれば、山里の暮らしは悪くなかつた。春にはぜんまい、わらびなどの山菜がとれたし、秋には茸きのこ取りのついでに、あけびや山葡萄を見つける楽しみもあつた。また風が吹いた翌日などは喰べ切れないほどの栗が拾えた。育つた村とわずかばかり違う嫁ぎ先の村の言葉にも馴染なじみ、おとしはしあわせだった。

だが人の世には、思いがけない落とし穴が仕かけられていることがある。去年の秋、村に山奥から熊が降りてきて牛を盗んだ。その熊狩りの勢子せこに出た夫が、手負いの熊に襲われて沢に転落し、死んだのである。婚家では夫の弟に後を継がせることにしたが、おとしと七つも年が離れている義弟では、死んだ兄の嫁を連れそわせるといふ、よくある話も起こらず、おとしは婚家を出された。

子供は置いて行つてもいい、と婚家では言つたが、おとしはその気にはなれず、今年の春

先、川筋をくだって生まれた村に子供と二人で戻ってきたのである。

実家は、おとしが出て行つたときと同じように貧しく暮らしていた。父親は早く死に、年老いた母親と、おとしより二つ年下の弟が、親戚しんせきから借りている僅かな田畑を作っている。そういう家だった。

おとしが戻ってきたことを、母親は悲しんだが、弟の兼吉は別の考えで受けとめたようだった。兼吉は、おとしが後をやってくれば、川下の鶴ヶ岡の武家屋敷に、荒子あらしこ（下男）奉公に行きたいと言つた。兼吉は、奉公で金をため、傾いた家をつくろつたり、せめて畑ぐらゐは親戚から買い取りたいという望みを持っていた。借りている田畑は、もとは自分の家のものだったが、父親が長患いしたときに親戚から金を借り、そのかたに取られていた。少しは家の体裁をととのえて嫁をもらい、借りている田畑を買いもどして、小作田をもっとふやしたい、と兼吉は言うのだった。荒子奉公のつてはある、とも言つた。

「こげだ家えでは、嫁もこねさげのう」

と兼吉は言つて笑つた。そういうことを考える年になっていたのだった。この春、兼吉はたくましい背をおとしたちに見送られて、城下町に奉公に行った。

弟がいなくなった後、おとしは田畑の仕事をほとんど一人でやつたが、山仕事で鍛えた身体には、それほど仕事が辛いとは感じなかった。おとしはせつせと働いた。事情を知っている村の者は、そういうおとしに温い言葉をかけ、居心地は悪くなかつた。